

2) OK-432 の内視鏡的局注により著明な縮小をみた残胃癌の1例

中沢 俊郎・塚田 芳久 (信楽園病院)
村山 久夫 (内科)

症例は79才男性で、胃潰瘍術後14年目に残胃癌に発生したボールマンI型胃癌例であり、OK-432 を毎週10 KE ずつ計50 KE 内視鏡的に腫瘍内に局注したところ、腫瘍は著明に縮小、平坦下し、組織学的にも間質に形質細胞の浸潤を伴った腫瘍細胞へ高度の変性脱溶を認めた。免疫学的には、局注前後で末梢血リンパ球数の増加を認めたが、腫瘍局所では、むしろ形質細胞の浸潤が著しく液性免疫の関与が示唆された。また、副作用として局注後12時間以内に39℃以上の高熱が必発し、高温による抗腫瘍効果の発現が示唆された。

手術不能胃癌例の増加に伴い、免疫賦活剤の内視鏡的腫瘍内局注療法は今後さらに汎用されるべき有効な治療法と思われた。

3) 残胃癌の病理学的検討

山中 秀夫・岩瀨 三哉 (新潟大学)
佐々木 亮・酒井 達也 (第一病理)
佐藤 敏輝・渡辺 英伸

残胃癌43例46個(男性38例41個、女性5例5個)の病理学的特徴を検討し以下の知見を得た。

1) 初回手術は男性24-75歳、女性42-68歳に、胃十二指腸潰瘍(24例)、胃癌(15例)でなされていた(不明4例)。残胃癌手術年齢は男性43-79歳、女性53-75歳であった。37例は Billroth-II法、5例は同I法で再建されていた。2) 初回手術後10年以上の進行癌23個と同8年以上の早期癌15個は、吻合部癌13個、縫合部癌2個、非断端部癌23個に分類された。吻合部癌は輸出脚側に、非断端部癌は小弯側に好発し、共に隆起型癌と分化型癌が多かった。3) 全割例19個のうち吻合部癌4個は種々の程度の吻合部胃炎粘膜に、8個は種々の程度の腸上皮化生粘膜に囲まれていた。腸上皮化生粘膜が吻合部胃炎粘膜に出現する程度と頻度は極めて低かった。前者4個の癌は吻合部胃炎粘膜から、後者8個の癌は吻合部胃炎のない粘膜から発生した可能性が高い。

4) 胃潰瘍治療における胃粘膜像の内視鏡所見

小越 和栄・加藤 俊幸
篠原 敏弘・関根 厚雄 (新潟地区胃潰瘍
富所 隆・成沢林太郎 (治療研究グループ)
田代 成元・登坂 尚志

最近 H₂ ブロッカーの出現で、潰瘍の治癒期間の短縮化の反面、瘢痕組織の不整、発赤、隆起瘢痕などが高

率に認められる。これらの不完全な潰瘍瘢痕を改善し、白色瘢痕化を促進すると言われているテブレノン(テブレノロン)を胃潰瘍に使用し、再生上皮化について内視鏡による観察を行った。症例は合計49例で、H₂ ブロッカー単独群とテブレノンを加えた群とに分け、簡易割付をし、群間比較をした。内視鏡観察を行い得た症例はテブレノン群19例、H₂ ブロッカー群20例の計39例である。結果は、両群共に潰瘍の治癒速度には差は無いが、テブレノンを加えた群では潰瘍瘢痕の白色化が早く、H₂ ステージでも再生上皮は白色となっている症例が殆どであった。これに反し、H₂ ブロッカー単独群では境界鮮明な赤色瘢痕が長く残り、すじこ状の隆起や不整な再生上皮が多かった。また、一例では隆起瘢痕が見られた。

結論として、テブレノンは潰瘍の瘢痕化に優れた働きを示すことが判明した。

5) 十二指腸球部の管腔内憩室に胆石が嵌頓した Bouveret 症候群の1例

登坂 尚志・齊藤 貞一 (巻町国保病院)
松浦 徳雄 (内科)
白井 良夫 (同 外科)
鈴木 力 (新潟大学 第一外科)

症例は46才、女。嘔吐で発症、内視鏡で幽門狭窄と診断され入院した。H₂ ブロッカーの使用で改善なく、幽門輪にカテーテルをそう入しての十二指腸造影、エコー、CT、DIC 等より、胆石と胆のう十二指腸瘻、球部腫瘍の疑と診断し、手術を施行した。胆のうは高度に萎縮し、球部と瘻孔を形成しており、球部内に胆石が嵌頓していた。又球部後壁に基部のある隔壁様の舌状の隆起を認め、切除、組織学的に管腔内憩室と診断した。この存在の為に胆石が球部に嵌頓し、Bouveret 症候群を呈したものであった。文献的に本症候群は本邦3例目、球部の管腔内憩室の報告は初めてと極めて稀な症例であった。

6) 手術によらない胆道結石除去術を行った2症例

小柳 隆介・藍沢喜久雄 (燕芳災病院)
土肥 良秋・大黒 善弥 (外科)

胆道結石症の治療は、過去120年間、手術療法が主流を占めてきたが、近年、非手術的胆道結石摘出術が多くの施設で試みられるようになった。最近私共の施設でも、2例に行い、満足すべき結果を得たので報告する。症例1は、72才女性、肝内結石症、右後区域枝にピ系石3ヶあり。PTCS にて24Fに拡張後、胆道鏡的に電気水圧衝